

「必ず」「絶対」「きっと」の文体的特徴
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の調査からStylistic characteristics of *kanarazu*, *zettai*, and *kitto*
An analysis of the balanced corpus of contemporary written Japanese

前坊 香菜子

要旨

本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて「必ず」「絶対」「きっと」のコーパスにおける出現傾向、文章の文体、語の係り先の述語を調査し、それぞれの文体的特徴を明らかにした。各コーパス内における出現の傾向としては、「必ず」が有意に多く、「きっと」は少なかった。しかし、「ブログ」「知恵袋」「国会」では「絶対」が、「韻文」では「きっと」が多く出現していた。また、ランダムサンプリングをした 300 例から各語の出現する場を分析したところ、「必ず」では地の文、丁寧体での出現が多く、「きっと」では会話文、くだけた文体での出現が多かった。そして、各語の係り先の述語を調査したところ、「必ず」は指示・推量、「絶対」は意志、「きっと」は推量のモダリティと共起しやすいことがわかった。以上のことから、「必ず」は事実性、客観性が高いテキスト、または公の場で考えを述べるテキスト、「絶対」は書き手の主張が強く表れるテキスト、「きっと」は推量などを含む主観的、情緒的なテキストに出現しやすいことが明らかになった。

キーワード：語の文体的特徴、コーパス、文体 ジャンル、文末表現

1. はじめに

日本語学習者（以下、学習者）の文章の中には書きことばと話しことばの混在や、客観的に書くべき文章に主観的な表現が出現するなど、日本語母語話者が読むと不自然さを感じるものがある。そのような課題を解決するためには、語の意味範囲だけではなく、語が使用される場、語の文体的特徴に関する知識が必要である。それらの情報は辞書や文章表現の参考書等に記述されていることもあるが、現状で得られる情報は限定的で、学習者にとっては不十分であることが多い。

本稿では、「必ず」「絶対」「きっと」という書き手の確信の度合いを表す副詞を例として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）における出現傾向、採取された用例を調査、分析し、各語の文体的特徴を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 「きっと」「絶対」「必ず」の辞書記述

副詞の「必ず」「絶対」「きっと」の用法について辞書では以下のように記述されている。

『明鏡国語辞典 第二版』(2010) 大修館書店

- 「必ず」 その事柄が間違いなくされるという気持ちを表す。
- 「絶対」 その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気持ちを表す。
- 「きっと」 自分の推測が実現する可能性が高いという気持ちを表す。
話し手の決意が強いさま、また、相手に対する要望が強いさまを表す。

また、各語の文体的な特徴については、以下のような記述がある。

『日本語語感の辞典』(2011) 岩波書店

- 「必ず」 まちがいなく、例外なしに実現することを確約する意味合いで、会話でも文章でも日常生活で幅広く使われる基本的な和語。くだけた会話でも使うが、「きっと」ほど会話的な響きはない。
* 「きっと」より客観的な感じのする表現。
- 「絶対に」 必ず、間違いなく確実に、の意で、会話にも文章にも使われる表現。
* 発言者の強い意志の感じられる語。
- 「きっと」 必ず実現するものと予測する気持ちを表し、主として会話に用いられることば。「必ず」よりくだけた日常会話でよく使われる。
* 客観的な感じの「必ず」に比べ、判断の根拠に自分の推測が入った感じの主観的な表現。

これらの記述では、3語ともに話し手の気持ち、判断が表れる語であり、文章でも会話でも使用される日常的な表現であるとなっている。そして、文体的な特徴については「必ず」と「きっと」を比較し、「きっと」のほうがくだけた日常会話で使用されると述べられている。しかし、この記述だけでは学習者はどのような文章で使用するのかを知ることは難しい。これらの語を使用する際に学習者の指針となる説明ができるような分析が求められる。

2.2 文章の文体と言語のレジスター(位相)

語の文体的特徴は、言語のレジスターと深く関係している。レジスター¹とは、「使用目的や使用状況で決まる言語変種」のことである。ボル他(2010)は、Biber他(2009)の提

¹ Halliday他(1977)の「談話の領域、伝達様式、役割関係という特有の価値と典型的に結びつく言語特徴が言語使用域(register)を構成する」と考え方もある。本稿では、分析対象とした『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における定義に則った。

案した分類項目をもとに①参加者、②参加者間の関係、③チャンネル、④生成及び理解を巡る状況、⑤場面、⑥伝達の目的、⑦話題の 7 項目に分け、BCCWJ のレジスター項目の特性を記述している。

『新版日本語教育事典』によると、「文体」は「個性的文体」と「類型的文体」とに大別されると述べられている。「個性的文体」とは、「漱石の文体」や「源氏物語の文体」のように特定の作家や作品の言語表現の個性的な特徴を指している。それに対して、「類型的文体」とは、「言語表現か何らかの観点から類型的に捉えた特徴」を指しており、①語彙・語法（文語体・口語体、ですます体・だ体・である体など）②文章のジャンル（手紙の文体、新聞の文体、論説の文体、広告の文体など）、③修辞（散文体、韻文体、四六駢儷体^{しらくべんれいたい}など）、という 3 つの観点からとらえたものである。

文章には、かたい文章、やわらかい文章、主観的・客観的な文章など、異なる印象を与えるものがある。柏野・奥村（2012）では、文章の分類指標として「対象読者（難易）、主観的・客観的、硬軟、丁寧さ、直接的な語り性の有無」という 5 つを挙げ、文章を分類している。

以上のような指標は、宮島（1972）が「単語の文体」について「文章全体としての文体をなりたせるような、個々の単語の持っている特徴のこと」と述べているように、語の文体的特徴を知る上で欠かせないものである。本稿では、レジスター、文章の文体（丁寧体、普通体等）、主観・客観、硬軟を分析の観点とする。

3. 調査の概要

3.1 調査の目的

本研究では、コーパスを用いて「必ず」「絶対」「きっと」の出現傾向、語が現れるテキストの文体、語の係り先の述語の傾向を分析し、各語の文体的特徴を明らかにする。

3.2 データと方法

本調査のために使用したデータは、国立国語研究所が 2011 年に構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）である。BCCWJ は 13 のサブコーパス（コア・非コアを分けると 19）からなっている。本研究では、これらのサブコーパスをレジスターとみなして分析することとする。「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」を同じレジスターとみなして一つにまとめ、「書籍」「雑誌」「新聞」「教科書」「韻文」「広報紙」「白書」「法律」「国会会議録」「ブログ」「知恵袋」の 11 のサブコーパスとした。検索には BCCWJ の検索用 Web インターフェースツールであるコーパス検索アプリケーション『中納言』²を

² <https://chunagon.ninjal.ac.jp/login>

使用し、採取された「必ず」³の用例 10,799⁴、「絶対」⁵の用例 9,081⁶、「きっと」⁷の用例 7,527⁸を分析対象とした。これらの用例から語が出現するテキストのレジスターの傾向を明らかにする。

また、実際の用例の分析のために、採取された用例から 300 例ずつランダムサンプリングし、目視により分析することとした。分析する観点としては、各語の出現箇所の文体、場（地の文か会話文か）、調査語の係り先の述語である。

4 調査結果と考察

4.1 サブコーパス別の出現頻度と傾向

表 1 に各サブコーパスから採取された用例の粗頻度とカイ二乗検定の残差分析にかけた結果を示した。100 万語あたりの頻度 (PMW) は参考までに示す。

表 1 サブコーパス別の粗頻度、残差分析結果、100 万語あたりの頻度

	必ず			絶対			きっと		
	頻度	残差(r)	PMW	頻度	残差(r)	PMW	頻度	残差(r)	PMW
書籍	6634	10.23 *	105.9	4529	-18.94 *	72.3	4678	8.78 *	74.6
雑誌	422	-0.40	94.9	404	2.77 *	90.9	264	-2.48**	59.4
新聞	64	1.05	46.7	58	1.62	42.3	25	-2.86 *	18.2
教科書	39	2.25**	42.0	21	-0.96	22.6	15	-1.46	16.2
韻文	4	-2.27**	17.8	2	-2.59 *	8.9	18	5.21 *	79.9
広報紙	652	23.89 *	173.6	128	-10.87 *	34.1	41	-14.67 *	10.9
白書	28	4.73 *	5.7	8	-1.40	1.6	0	-3.70 *	0.0
法律	1	1.24	0.9	0	-0.70	0.0	0	-0.62	0.0
国会	287	5.19 *	56.2	262	6.30 *	51.3	28	-12.32 *	5.5
ブログ	950	-24.13 *	93.2	1906	18.16 *	187.0	1350	7.24 *	132.4
知恵袋	1673	-3.76 *	163.1	1763	8.79 *	171.9	1108	-5.17 *	108.0
合計	10754	20.94 *	102.5	9081	-0.51 *	86.6	7527	-20.44 *	71.7

* : 5%水準で有意差あり ** : 1%水準で有意差あり

³ 検索式は次のとおりである。語彙素読み="カナラズ" AND 品詞 LIKE ("副詞%") WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="20" AND tglKugiri="|" AND tglFixVariable="2"

「語彙素読み」で検索したのは、活用しないこと、検索語の 1 つである「きっと」の漢字表記に複数の可能性があり、「語彙素読み」のほうがもれが少ないと考えたため、すべての語を「語彙素読み」で検索することにした。「語彙素読み」でも「語彙素」でも結果は同じであった。

⁴ 2 の検索式より採取された用例は 14966 件であるが、そのうち「必ずしも」が含まれた用例を除いた数である。

⁵ 検索式は次のとおりである。語彙素読み = "ゼットイ" AND 品詞 = "名詞-普通名詞-副詞可能") WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="20" AND limitToSelfSentence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="" AND encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"

⁶ 4 の検索式より採取された用例は 12015 件であるが、そのうち名詞の用法、「絶対的」「絶対温度」等の漢字熟語を削除した数である。また、「絶対に」は含まれている。

⁷ 検索式は次のとおりである。語彙素読み = "キット" AND 品詞 = "副詞") WITH OPTIONS unit="1" AND tglWords="20" AND limitToSelfSentence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="" AND encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"

⁸ 6 の検索式より採取された用例は 7672 件であるが、名詞の用法と、副詞の用法のうち「きっと覗む」等の用例を削除した数である。

全体的な傾向としては、各サブコーパスにおける「必ず」の出現は有意に高く、「きっと」の出現は有意に低かった。各語については、表2のような傾向がみられた。

表2 サブコーパスにおける「必ず」「絶対」「きっと」の出現傾向

	必ず	絶対	きっと
頻度：高い	広報紙、書籍 白書、国会、教科書	ブログ、知恵袋 国会、雑誌	書籍、ブログ 韻文
頻度：低い	ブログ、知恵袋 韻文	書籍、広報紙 韻文	広報紙、国会、知恵袋、 白書、新聞、雑誌

上記の傾向は、サブコーパスの特徴と関連していると考えられる。特に、特徴的な傾向が観察された「書籍」「広報紙」「国会」「ブログ」「知恵袋」「韻文」について考察する。なお、「書籍」には、小説などの創作から実用書などの事実を述べた多種多様なテキストが収録されており、単純な分析をすることはできないため別に分析を行う。

まず、「広報紙」であるが、「必ず」の頻度が極めて高く、「きっと」「絶対」の頻度は低い。「広報紙」は、公的な立場から市民に事実や情報、報告を客観的に伝えるものである。実際に採取された用例を概観すると、「必ず～てください」というお知らせが多かった。公的な立場から文書で何らかの指示をする際、「きっと」「絶対」という語は適さないという判断がされているのであろう。

「国会」は公的な場で行われた政治的な答弁を記録したものである。つまり、発信者と受信者との間に相互作用性⁹があり、時間と場を共有しているものである。このコーパスでは、「絶対」「必ず」の出現が有意に多かった。採取された用例をみると、「絶対」では、否定形やネガティブな評価の語との共起が多く、答弁者の強い主張が表れるものが多かった。答弁の場で自らの主張を述べ、相手を問い詰めるということが行われることと関係があるのであろう。そして、「必ず」は事実を述べる場面での使用が多い。このことは、公の場での発言や聞き手を納得させるような客観的な述べ方をする際に選択されやすい語であると考えられる。

「ブログ」「知恵袋」の特徴としては、インターネット上のテキストであること、特に第三者の校閲を受けず、自分の考えを記しているということである。この2つのコーパスには「絶対」が多く出現している。特に、「ブログ」のほうが頻度は高く、その用例では書き手の強い主張、何かを強く勧める、もしくは否定する表現が多くみられた。他の2語の出現傾向は異なっていた。「ブログ」では「きっと」の出現頻度が高いが、「知恵袋」では低い。そして、「必ず」の出現は「ブログ」「知恵袋」共に少ないが、「ブログ」のほうがその程度が低い。この違いは相互作用性の有無による。「ブログ」は自らの考えを主観的に記した一方通行のテキストであることが多い。それに対して、「知恵袋」は質問者と回答者という参加者がいる。そこには一種の対人の場が生まれ、質問者も回答者もある程度の丁寧さ、あらたまりを持ったやり取りが行われる。また、回答者はあいまいな回答ではなく、質問

⁹ 相互作用性とは参加者同士で直接的なやりとりがあるかどうかである (Biber et al. 2009)。

者が納得する記述をしようとする。「知恵袋」に「きっと」が少ないこと、「ブログ」「知恵袋」で「必ず」の頻度に大きな差がみられるのは、これらが影響しているのであろう。

「きっと」は全体的な傾向として出現頻度は高くはない。その中で、「韻文」における「きっと」の出現は特徴的である。採取された用例をみると、ひらがなの多さが目につく。そして、自由な言語表現がみられる。このことから「きっと」はやわらかい文章、そして、情緒的な表現のテキストに使用されやすいと考えることができる。

さて、「書籍」であるが、前述したとおり様々なジャンルの文章が収められている。そこで、「書籍」に付与されている日本十進分類法(NDC)ごとの出現傾向を調査した。表3に粗頻度、残差分析の結果、そして、100万語あたりの出現頻度(PMW)を示した。

表3 NDC別の粗頻度、残差分析結果、100万語あたりの頻度

	必ず			絶対			きっと		
	粗頻度	残差(r)	PMW	粗頻度	残差(r)	PMW	粗頻度	残差(r)	PMW
0 総記	196	4.89 *	131.4	99	-0.46	66.4	65	-4.83 *	43.6
1 哲学	659	12.37 *	199.6	280	-2.50**	84.8	167	-10.91 *	50.6
2 歴史	439	3.91 *	74.2	277	1.20	46.8	197	-5.43 *	33.3
3 社会科学	1339	14.57 *	98.1	750	2.84 *	55.0	331	-18.57 *	24.3
4 自然科学	510	12.30 *	113.4	180	-4.22 *	40.0	125	-9.12 *	27.8
5 技術・工学	512	12.90 *	125.5	191	-3.09 *	46.8	100	-10.89 *	24.5
6 産業	245	5.34 *	110.1	124	-0.58	55.7	84	-5.20 *	37.7
7 芸術・美術	485	1.08	118.9	384	4.44 *	94.2	248	-5.57 *	60.8
8 言語	125	5.22 *	127.2	41	-2.93 *	41.7	44	-2.74 *	44.8
9 文学	1842	-32.51 *	91.5	2001	2.18**	99.4	2941	33.00 *	146.0
分類なし	282	-5.55 *	121.8	202	-3.41 *	87.3	376	9.38 *	162.4
	6634	-22.82 *	105.9	4529	-120.66*	72.3	4678	-10.15 *	74.6

*: 5%水準で有意差あり **: 1%水準で有意差あり

NDCを見ると、「0. 総記」から「6. 産業」まで、そして、「8. 言語」は「必ず」の出現頻度が高い。そして、「9. 文学」「分類なし」は「きっと」の出現頻度が高い。また、「絶対」は全体的に頻度が低いという傾向をみせているなかで、「3. 自然科学」「7. 芸術・美術」は頻度が高かった。

「0. 総記」から「6. 産業」、「8. 言語」は、意見や思想、事実を述べたテキストが収められている。つまり、客観的に記述されたものが多いということである。そのような文章のジャンルでは「必ず」の使用が多いことがわかる。

それに対して、「9. 文学」は、創作、娯楽的な内容のテキストである。登場人物の立場からの描写や会話文があるため、主観的な表現が多くなる。この特徴が「9. 文学」に「必ず」が少なく、「きっと」が多く出現することに影響を与えているのであろう。

「分類なし」は、コーパスに収集される際にNDCが付与されていなかった書籍のグループである。このグループに含まれている書籍の内容を調べると、調査語ごとに特徴がみられた。「きっと」の書籍の約9割は児童文学であった。「絶対」にも児童文学が見られたが、もう少し対象年齢が高い小説が多かった。そして、「必ず」には小説も含まれてはいるが、

「必ず」「絶対」「きっと」の文体的特徴
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の調査から

ガイドブックや入門書などが多かった。語り口調の多い児童文学に「きっと」が多く、ガイドブック等に「必ず」が多いということから、「きっと」はくだけた場で使われやすく、「必ず」は情報を伝える場で使われやすいことがわかる。

「3. 自然科学」「7. 芸術・美術」は、社会や人の生み出した現象に対する考えを記したテキストが収められている。特に、「3. 自然科学」では教育、家庭に関する実用書、エッセイ等が多く、「7. 芸術・美術」ではスポーツ、演劇、音楽について取り上げた書籍が多かった。テキストもインタビューやエッセイ調であり、あまり硬い文体ではなかった。

サブコーパスの特徴から各語には次のような傾向が明らかになった。

「必ず」の出現頻度が有意に高いのは事実を述べるテキスト、そして、公的、あるいは何らかの専門性を持った人が執筆したテキストである。「絶対」の出現頻度が有意に高いのは、書き手（発信者）の考え、主張が述べられたテキストで、なおかつ相互作用性があるものであった。「きっと」の出現頻度が有意に高いのは、創作や書き手が自由に自らの考えを記したテキストである。

4.2 「必ず」「絶対」「きっと」の文体的特徴

これまでサブコーパスにおける出現傾向を観察してきたが、語の使用をみるには、実際の用例を分析することも必要である。そこで、各語の用例から 300 例をランダムに取り出し、語の出現する文章の文体、場、語の係り先の述語を分析した。

4.2.1 出現する場と文体

300 の用例がテキストのどのような場で出現しているのか、つまり、地の文か会話文のいずれに現れているのかを調査した。調査結果と残差分析に掛けた結果を表 4 に示す。

表 4 出現の場と残差分析の結果 (r)

	必ず	残差(r)	絶対	残差(r)	きっと	残差(r)
地の文	265(88.3)	4.861*	229(76.3)	-1.389	217(72.3)	-3.472 *
会話	35(11.7)	-4.861 *	71(23.7)	1.389	83(27.7)	3.472 *

() は割合 * : 5%水準で有意差あり

出現の場としては、3 語とも地の文での割合が多い。そして、地の文の中での 3 語の出現は、「必ず」が有意に多く、「きっと」が有意に少なく、会話ではその逆である。

次に、地の文における文体を調査した。「です・ます体」を丁寧体、「だ・である体」を普通体、そして、そのどちらでもなく、会話調、省略された文などをくだけた文体として、分類して分析した。文末表現が採取した用例の中に示されておらず、判断ができなかったものは「(不明)」とした。結果を表 5 に示した。

「必ず」は丁寧体と普通体で有意に出現しているが、くだけた文体での出現は低い。「きっと」はくだけた文体での出現が高く、丁寧体では低い。「絶対」はくだけた文体での出現が有意に高かった。

表5 語が出現する文体と残差分析の結果

	必ず	残差(r)	絶対	残差(r)	きっと	残差(r)
丁寧体	124(46.8)	5.072 *	71(31.0)	-1.548	54(24.9)	-3.755 *
普通体	107(40.4)	2.814 *	69(30.1)	-1.462	65(30.0)	-1.472
くだけた	25(9.4)	-8.495 *	80(34.9)	2.844 *	94(43.3)	6.034 *
(不明)	9(3.4)	0.358	9(3.9)	0.887	4(1.8)	-1.277

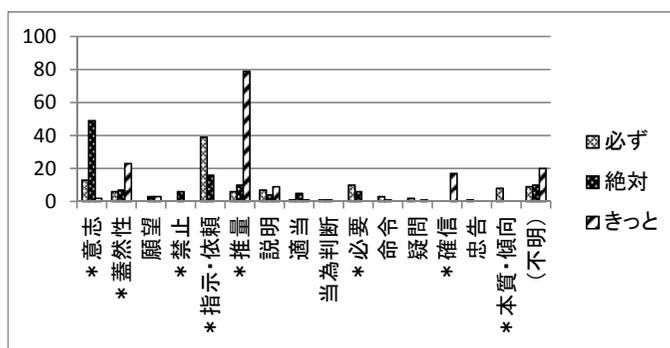
() 内は割合 * : 5%水準で有意差あり ** : 1%水準で有意差あり

これらの結果から、各語の出現の場の傾向が明らかになった。「必ず」は、地の文、なおかつ丁寧体や普通体に多く表れることから、客観的な事実を述べるテキストに出現する傾向がみられる。そして、「きっと」「絶対」は会話文、くだけた文体に現れることから、主観的なテキストに多く出現すると言える。

4.2.2 語の掛かり先の述語の傾向

命題に対する話者の心的態度はモダリティによって表現される。調査語と共起するモダリティをみることは語の文体的特徴を知る助けとなると考えられる。そこで、300の用例において各語が掛かる述語を調査した。さまざまな言語形式があったため、個別の言語形式でまとめるのではなく、それぞれの用法にまとめて分析した。分析の基準として『現代日本語文法4』に記述されているモダリティの意味と用法を用いた。分析した結果、「意志」「蓋然性」「願望」「禁止」「指示・依頼」「推量」「説明」「適当」「当為判断」「必要」「命令」「疑問」「確信」「忠告」「本質・傾向」の15に分類された。これら以外でモダリティ形式のない述語は「事実」としてまとめた¹⁰。最も多かったのは「事実」で、「必ず」は194、「絶対」は182、「きっと」は145であった。

ここでは、調査語がどのようなモダリティと共起するのかという点から分析することにする。述語に現れたモダリティのグループの出現頻度をグラフ1に示した。そして、どのモダリティのグループに有意な傾向があるのかをみるためにフィッシャーの正確確率検定を行った。有意差のあったモダリティのグループには*を付けた。有意差のあるモダリティのグループを分析の対象とする。



グラフ1 語の係り先の述語のモダリティ

¹⁰ 本来、モダリティ形式がなくてもモダリティは存在し、形式と意味・機能が1対1で対応するわけではないが、今回はモダリティ形式があるもののみを分析の対象としたため「事実」としてまとめた。ただし、「絶対に～する」のような明らかに意志のモダリティが表れているものには「意志」として分類している。

「必ず」「絶対」「きっと」の文体的特徴
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の調査から

「必ず」と共起するモダリティで最も多いのは、「指示・依頼」で、次に「意志」であった。このことから「必ず」はある事態に対する行動と結びつきやすいということがわかる。特に「～てください」という丁寧な形式で出現が多く、客観的な態度で述べる際に使用されやすいことが明らかになった。また、「本質・傾向」との共起もみられた。特に、「本質・傾向」の用法である「～ものだ」は、「必ず」だけに出現している。これらのモダリティは、直接、行動を促すものではないが、事態に対する評価を表すことで、間接的に行動を促す機能をもっている。どちらのモダリティも主張を表すものではあるが、強制的ではないという点で「必ず」は主張の強さを抑えたテキストに現れることがわかる。

「絶対」と共起するモダリティで最も多いのは「意志」であった。そして、「禁止」は「絶対」だけに共起している。用例をみても「～してやる」「～させない」のような強い表現や否定形、そして、「いや」「だめ」のようなネガティブな語との共起がみられた。また、「！」が文末につけられることもあった。これらのことから、「絶対」が強い直接的な主張と共起しやすいことがわかる。

「きっと」と共起するモダリティで最も多いのは「推量」で、他の語と比較しても群を抜いている。そして、「確信」のモダリティは「きっと」にのみ現れていることや「蓋然性」との共起も他の語と比べて多いことから、「きっと」が書き手の主観的な推測、考えを前面に表す語であると言える。そして、これらのことは、「きっと」の辞書記述にあった「自分の推測が実現する可能性が高いという気持ちを表す」ことを裏付けている。

だが、モダリティが述部にあるからといって、必ずしもモダリティが書き手の態度が表現されるとは限らない。例えば、「コーヒーを飲みたいが、金がない」のようモダリティが従属節に現れると、希望の表出と言う発話機能のモダリティが述べ立てという判断・解説を述べる発話機能のモダリティに移行することがある(仁田 2009)。そこで、モダリティがどのような位置に現れているのかを調査することで、語の主観性、客観性の強さが表れると考えた。表 6 は、その結果を示したものである。「従属節」とは従属節の中にあらわれているもの、「文中(という)」は「モダリティ+という+名詞」、「文中(引用)」は「モダリティ+と思う／考える」という形式、「連体修飾」はモダリティが連体修飾節に現れているもの、である。

表 6 モダリティが表れる位置と残差分析結果

	必ず	残差(r)	絶対	残差(r)	きっと	残差(r)
従属節	63(21.0)	3.956 *	42(14.0)	-0.268	25(8.3)	-3.688 *
文中(という)	10(3.3)	-0.129	15(5.0)	1.809	6(2.0)	-1.680
文中(引用)	21(7.0)	-3.264 *	35(11.7)	-0.218	52(17.3)	3.482 *
文末	176(58.7)	-0.432	168(56.0)	-1.586	193(64.3)	2.018**
連体修飾	22(7.3)	1.302	28(9.3)	3.104 *	3(1.0)	-4.405 *
(不明)	8(2.7)	-1.922	12(4.0)	-0.565	21(7.0)	2.487**

()は割合 * : 5%水準で有意差あり ** : 1%水準で有意差あり

本来、典型的なモダリティは「文末」現れるものであり、調査の結果でも「文末」が最も多かった。そして、「きっと」が「文末」に有意に多く出現していた。「きっと」はモダリティ本来の機能が働いている文に現れやすいと言える。

「従属節」には「必ず」が有意に多く、「きっと」は少なかった。従属節に現れるということは、文末に現れるよりも客観性が生まれるということである。このことを考えると、「必ず」は客観性のある環境に現れやすく、「きっと」はそのような環境には向かないと言える。

そして、思考動詞と共起する「文中(引用)」は「従属節」とは反対の傾向がみられた。思考動詞と共起するということは、書き手の「私」が前面に表れていることである。つまり、「きっと」は主観性の強い環境に現れやすいが、「必ず」は現れにくいと言える。

「連体修飾」で有意差がみられたのは「絶対」「きっと」である。「連体修飾」の形式で現れているということは、モダリティの機能が弱くなり、述べ立て、つまり、情報の伝達する役割を果たすようになる。このことから、「絶対」はモダリティの機能が弱められた環境でも現れることができるが、「きっと」は情報伝達となるような環境に現れにくい主観性の強い語であることがわかる。

5. まとめ

これまでのコーパスを調査した結果をまとめ、「必ず」「絶対」「きっと」の文体的特徴を記述する。

「必ず」は、「広報紙」「書籍」に多く出現しており、情報提供、事実を説明したテキストに使用されやすいことがわかった。また、「広報紙」「国会」のような公的な場での出現も多くみられた。一方、書き手の主観的な考えや主張が書かれる「ブログ」での出現頻度が低い。これらのことから自らの考えを客観的に述べる場、他者へのあらたまり、丁寧さを意識する場で使用されることも明らかになった。

「絶対」は、「ブログ」「知恵袋」「国会」に多く出現していた。その一方で、「書籍」「広報紙」での出現は少なかった。また、「意志」のモダリティ、否定形やネガティブな評価の語との共起も多かった。これらの点から主観的なテキスト、書き手や発話者の考えの強さが前面に表れるテキストに使用されていることがわかる。

「きっと」は、「ブログ」「知恵袋」に多く出現していた。そして、小説の会話文のようなくだけた文体や「韻文」のような情緒的でやわらかいテキストでの出現も多かった。また、「推量」のモダリティとの共起が他の語と比較しても多かった。これらのことから、書き手の推量などの主観的な考えや主張が述べられるテキスト、情緒的な表現がみられるテキストでの使用に適していることがわかる。

また、語が出現する環境を調査することで、各語が持つ客観性、主観性の強さもある程度知ることができた。「必ず」は情報伝達の役割が強くなる従属節での出現傾向が有意に高く、思考動詞との共起は低かった。つまり、3語の中では客観性が最も高い語であることが

わかる。それに対して、「きっと」は従属節と連体修飾内における出現が有意に少ないことから、客観的なテキストの環境に現れにくいほど主観性が強いと言える。「絶対」は「意志」のモダリティとの共起が多く、書き手の主観の強さがみられるものの、連体修飾の中での出現が有意に多いことから、語本来の主観の強さを保持する力は「きっと」ほど強くないことがわかる。

これらの結果から、文体的な特徴を以下のように記述することができる。

「必ず」

- 事実性や伝達性の高い情報提供の文章に多い。
- 客観性のある表現が望ましい公的な場で出現しやすい。

「絶対」

- 書き手の考え、主張が強く現れる文章に多い。
- 相互作用性のある場で出現しやすい。
- 客観性や事実性が強く求められる文章には適さない。

「きっと」

- 書き手の主観的な考え、主観性の強い推量が表れる文章に多い。
- 文学など創造性、娯楽性があるもの、くだけた文体、情緒的な文章に使用されやすい。
- 客観性や事実性が求められる文章に適さない。

6. 今後の課題

本稿では、書き手の確信の度合いを表す副詞の類義語「必ず」「絶対」「きっと」をコーパスから分析し、これらの語の文体的特徴を明らかにした。しかし、この記述だけでは、学習者が実際にどのような文章で使用すればよいか明確に理解することは難しい。つまり、文章のジャンルに関する知識も必要である。今後の課題は、学生にとっても理解しやすいような文章の分類を試みるとともに、他の副詞の文体的特徴の分析を行い、産出の際に役立つ指針を記述することである。

参考資料

『語感の辞典』(2011) 岩波書店

『新版日本語教育辞典』(2005) 大修館書店

『明鏡国語辞典』(2010) 大修館書店

Douglas Biber and Susan Conrad (2009) *Register, Genre, and Style*. Cambridge University Press

- M.A.K ハリデイ、ルカイヤ・ハサン (1997) 『テキストはどのように構成されるかー言語の結束性ー』
- 柏野和佳子、奥村学 (2012) 「書籍テキストへの分類指標人手付与の試みー『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の収録書籍を対象にー」 言語処理学会第18回年次大会発表論集 pp.1,260-1,263
- 仁田義雄 (2009) 『日本語のモダリティとその周辺』
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4』
- ホドシチェク・ボル、仁科喜久子、ベケシュ・アンドレイ (2010) 「レジスターに基づく日本語のモダリティ形式の分類」『「日本語コーパス」平成21年度公開ワークショップ予稿集』 pp.251-256
- 前川喜久雄監修 (2013) 『講座日本語コーパス1. コーパス入門』
- 宮島達夫 (1977) 「単語の文体的特徴」『村松明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院 pp.871-903

(まえぼう かなこ 言語社会研究科博士課程)